オーロラの殺意

藤本 泉

著者略歴　日本大学国文科卒　作家　主著書「呪いの聖域」「ガラスの迷路」「時をきざむ潮」他多数

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction

オーロラの殺意

〈JA 103〉

昭和五十三年一月二十日　印刷
昭和五十三年一月三十一日　発行

（定価はカバーに表示してあります）

著者　藤本泉
発行者　早川清
印刷者　草刈龍平
発行所　株式会社　早川書房
郵便番号　一〇一
東京都千代田区神田多町二丁目二
電話東京（二五四）一五五一（代）
振替番号　東京・六－四七七九九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・製本／中央精版印刷株式会社

ハヤカワ文庫JA
〈JA 103〉

オーロラの殺意

藤本　泉

早川書房
720

目次

第一章　雪原を貫く長い「蛇」……七
第二章　モスクワの夜の底に……四九
第三章　はるかなる脱出……八七
第四章　秘密地帯へ……一三三
第五章　愛と血脈と戦闘と……一七一
第六章　シベリアと東京の間……二三五
解説〈権田萬治〉……二八七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

きみら
壁に
壁紙に
ひっついた
かわいいきみら
なんで言葉と仲良くなった？
ごぞんじか
フランソワ・ヴィヨン
書かないときは
強盗をやりました

マヤコフスキー『作家仲間』より
（小笠原豊樹・関根弘／共訳）

オーロラの殺意

第一章　雪原を貫く長い「蛇」

1

ハバロフスクのにび色した初冬の曇り空の下で、列車ロシア号に乗りこみ、シベリアの広野の中を、モスクワへ向けて走り出して四日目。

月村皓の心の中では、何かがこわれた……。こわれたというより、糸目がばらばらに切れたとか、つなぎ目がすっかりゆるんでがたがたになったとか言ったほうが、より適切かもしれない。

十一月に入って二日目のその朝、同じ二等車の車室の下段ベッドにいる、さし絵描きの尾竹が、スケッチブックに描いてみせた胴体だけの生物というのを見たとき、彼は心の中でつぶやいたのだった。

（ああ……、ぼくだけが、こんな妙な気持になってるのじゃないんだ。この人も――、こんなに何もかもわかっているすれっからしみたいなおじさんでも、シベリアってやつには、参っちゃったんだな）

専門が日本画だという尾竹は、横長のスケッチブックを、左右に二ページ見開きにした上へ、長々と横たわる、蛇に似た生物を描き出していた。長いまばらな毛を生やしているだけで、手も

足も、むろん目鼻もない。即興の戯画にすぎないだろうが、さすがはその道三十年と自分で言うだけあってプロの絵だ。奇怪だが、何となく血が通っている。そのかたちが、すっぱりと画面を上下に区切って、堂々たる量感を持っているのである。

「これが、おれのシベリアや。よく、見とくなはれ」

兵庫の生まれだという尾竹は、朝からチビチビなめている火酒(クオツカ)で、顔をさくら色にしている。酒を飲んでいなければ絵を描いており、どちらでもなければ眠っている。このいささかじじむさい人物は、そのとき、憮然とした声で言ったのだった。

「ほんまに、しゃあないやつやなあ……どこまで行ってもおんなじや。手がつけられんがな、この野っ原は……。四日も走ってまだ半分しか来ない。なんや、頭がおかしくなってしもた」

(そうだっけ——。日本画では、特に風景画のことを、山水って言うんだっけ——) 皓はふと思いついたことを、口には出さず、上段のベッドからスケッチブックを見おろして長いため息をついた。(それだのに、ここには山もない、水もない。アクセントなしの地平線オンリーだ)

ハバロフスクからノボシビルスクまでは山がちだときいたが、窓外の荒野の起伏は、日本の山とはまるで印象が違う。そして河もまた、心を和ませる流水のやさしさを持たない。早くも凍(い)てついてささくれだった岸辺のなまり色は、旅愁をさそうにはあまりに漠然とそっけない。また、あまりに人気が少なすぎる。毛布一枚で真夜中も過ごせるだけに、充分暖房のきいた車内を行きつ戻りつして、眺めれば眺めるほどに……。

尾竹は無口だ。ときどき必要なことだけを言い、相手がそれに答えようと答えまいとかまわぬ、といった表情で自分の沈黙に返る。

そして月村皓(こう)も、ふだんはかなりしゃべるほうなのだが、このところ口が重い。とにかく、二

日目の夕方あたりから、シベリアの果てしない地平線が、なんとなく彼を混乱させ始めたのだ。

あれほど、見たいとのぞんだ、これがシベリアなのか……。歴史についても、産業についても、その面積や人口についても、すでにかなり勉強したつもりのシベリアなのだろうか。

何かしら、皓は、自分が感違いしたように思った。会おうとして、はるばるとやって来たのに、その人物の顔でなく、いきなり裸の背中を見せられたような場違いなイメージである。どちらを向いても同じような荒野の果てに、陽が昇ってはまた落ちて行くのを、くり返し見ているうちに、徐々に自分が何をしに、はるばるとこんなところまでやって来たのかが、わからなくなった。ついで、なぜか、と自分に問いかけるのが面倒くさくなったのだった。

本を読む気にもなれない。写真をうつす気にもなれない。歩いても、歩いた気がしない。この広大無辺な荒野の中では、広軌鉄道をつっ走る十六両編成の大型列車も、小さいしゃくとり虫より更に小さい。ましてや、その中に詰めこまれている人間は、塵のようにこまかい——。そう考え始めると、もう、逆立ちをしようが、とんぼ返りを打とうが、ただじっと寝ていようが、結局は同じように感じられて来るのである。

終日、目路のかぎりつづく、モミ、カラマツ、そして白樺（ベリョーザ）などの林のかなたには、荒々しくまぎれようのない地平線だけがある。ときたまその間のわずかなくぼ地にしがみついている集落は、雪を半ばかぶっている。冬眠中の昆虫の集団が保護色をしているように、その色はまぎらわしくまだらだ。

土地っ子らしいロシア人たちは、黒パンを食べながら車窓に頬杖をついて、終日飽きもせずその風景を眺めている。ヨーロッパ全土が地中海もろとも、すっぽり入ってしまう大きさの、このシベリアこそ、彼らのふるさとなのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そのうちの誰かに近づいて行って、

「今日は！」のひとことも言えば、たちまち彼らは、「どうです！　この母なる大地の広さは？　すばらしいでしょう。何とも形容のしようがないでしょう！」などと応じて来て、会話の勉強をさせてくれるだろう。だが、いまの皓はそれをする気にもなれないのであった。

その上、彼にはいまひとつの心理的な重荷があった。

このシベリア鉄道の列車の中で、彼と会うはずの人物がいるのだ。それが誰か、彼のほうは知る手段がないのだ。

はたからみればたいへん冒険的で、当人にしてみればひどく憂うつで不安なこの異国の旅は、若い彼にとって、説明しようもなく複雑で大きい賭けであった。万難を排してもその正体を見たいものが、このシベリアの果てにある筈なのだ。そのいとぐちとして、先ず、列車の中で〝某〟かが名乗り出るのを待たねばならぬという条件が、いやおうなく、今の彼に与えられている。それに対してもし「否」と言えば、この列車に、ひそかな目的を抱いて乗りこむことはできなかった筈だ。

男か？　それとも女だろうか？　年配者かもしれないし、若い人かもしれない。皓はすでにハバロフスク駅で、この列車が出るのを待っていたときから、絶えず周囲を視線でさぐっていた。三両目の中ほどに、二等車の四人乗りの車室を割りあてられると、先ず、同室の客の行動を目で追った。

日本人でないことだけはわかっているから、尾竹は除外しよう。二段ベッドの向かいの上段にいるグルジア出身だという男。スターリンそっくりの濃いひげを生やした、頑丈な男。まさか、この人ではあるまい。彼は乗車して初めての夕食に、火酒を四百グラム飲んだあげく、居合わせ

る誰かれに、自分の胸の勲章を見せびらかしてからみつき、ついに、百キロもありそうな堂々たる食堂主任の女にどなられた。

「ここは、戦場じゃありません！」

それから、その下段にいる、ウラジオストックの女子学生。豊かで硬そうな髪をおさげにして、栗色の目がいつでもいたずらっぽくあたりを眺めている、赤い頬のハイティーン。まさか、この女ではあるまい？

彼女は、眠るとき以外は、いつも隣の車室へ行っている。故郷の大学から六千三百キロ離れたノボシビルスクまで、テニスの試合をしに行くのだが、総勢五人の中から彼女だけがはみ出して、隣の男ばかりの車室へ入っているというわけで、一日中コーラスやら笑い声やらで、彼女たちの部屋の賑やかなこと……。

このふたつの部屋にいないとすると、どこにその〝某〟はいるのか。通路をへだてて向かいの、ドアを開けるたんびに四人のうちの誰かと顔の合う車室か？

それとも、それは、毎朝通路で顔が合う一等車の客、刺繍した民族衣裳を着た老人かもしれない。一度しか顔は見ないが、ひどくまなざしが印象的な子供づれのマリ人の母親かもしれない。

それとも？

この列車は、ベッドの硬軟がそれぞれ違うだけで、一等も二等も同じ広さの四人乗りコンパート式だ。朝、昼、晩と食堂車で顔を合わせるうちに、モンゴル人、ヤクート人、マリ人、ブリヤート人、スエーデン人、アメリカ人、スーダン人などがいることがわかって来た。尾竹が、いろいろな国籍を持つ顔をスケッチするために、強引に、かたことのロシア語と英語でボツリ、ボツリと話しかける、そのお相伴に皓はあずかった。ブラック、ブラウン、イエロー、ホワイト、お

よびその中間色と、ひと通りのカラーが全部揃っているその中で、何いろをしているのか、その〝某〟は？

2

事件発生以来、何回となく心のうちで恐れ疑いつつも待ち望み、ときに絶望したりしたあとで、やっと自分のものとすることのできたこの旅行だ。むろん皓はシベリアについて、またソ連邦全体について、かなり予備知識を仕入れて来たつもりだった。

正称、ソビエト社会主義共和国連邦の大きさは、ほぼ南北五千キロ、東西一万キロで、まさに世界第一だということ。西の端から東の端までの時差は十一時間もあるということ。その地形は、北と西へ向かってひらけた、巨大な円形の舞台に似ていて、その平たい部分は国土の六十五パーセントを占める平原だということ。

山は南東部にあり、最高峰は中央アジア、コムニズム峰の七千四百九十五メートル。最低部はカスピ海東岸カラギェ陥没地の海面下百三十二メートル。

……それから百二十の民族、十五の連邦共和国、二十の自治共和国、十の民族管区。アメリカについで世界第二の工業生産高、一九七〇年現在で三万七千の集団農場（コルホーズ）と、一万三千の国営農場（ソフホーズ）……医療、教育はすべて無料……この辺までは、中学、高校の社会科のテキストで充分間に合うのであった。

しかし、それ以上のことになると——。

実際、ちょっと気をつけてみれば、街の本屋にも学校の図書館にも、なんとたくさんのソ連関係の本があることか。政治について、歴史について、経済について、また、古典から新版の国外出版に至るおびただしい数の小説、それから紀行文、随筆、あらゆるカラー写真を満載したガイドブック、そして新聞や週刊誌をにぎわす人工衛星の話題のうしろに、時おりチラと姿を見せるスパイ網の記事に至るまで。

……もともと、神保藍子の、あの何かに憑かれたような、一風変った美しい目に、兄の照とも魅せられて以来、皓は、日本の六十倍の面積があるという、この巨大な北の国に、ずっと目を向けて来た。自分の手にはとても入りそうにない、その七歳年上の再従姉の視線がそちらの方を向いていたからという理由、それだけで、十四歳の彼は或る日、ふいにロシア歌謡がたまらなく好きになった。レコードを買って来て、意味もわからず、〝どん底〟の歌をロシア語のかたことで歌おうとし始めた。……そして、当時中学生だった彼は、浪人中の兄、照の受験志望が、とつぜん理科から文科へ、また目標がT外語大学になったのを、素直に理解した。

（藍子さんが露文科にいるんだものな……）

彼女と、そのふたつ年下の照はそろって長身で、ややかげりのある白い肌を持ち、いくらかくぼんだ目の輝きが互いに似通っていた。ふたりが同じ道を歩むのは、いかにも似つかわしく見えた。

藍子が共産党に入ると、照もまたすぐ入党した。彼女が一年ほどして党を出ると、彼もそれにならった。

やがて六〇年代前半の安保闘争に参加した神保藍子が、はげしい政治闘争の波にゆり上げられ、

つき動かされて行ったとき、照は同じ外語大学の後輩として、いまは互いにみとめあった恋人として、いつも同じスクラムの中にいた。

皓がもう少し兄に年が近ければ、彼らの間には一般に三角関係と呼ばれる、あの激しい摩擦作用が起きたかもしれない。だが、彼は足ずりしたいような憧憬の情を抱いただけで、結局、ふたりに対してはシンパの位置にとどまった。十代の彼にとって、ふたりはあまりに大人に見えたのである。

十四歳から十九歳までの間、皓はふたりのまわりをうろついて、時には女友達に助けられたりもしながら、かろうじて自分にもできる役どころを見つけていた。藍子に好意を持たない母が、照と藍子の関係を不愉快がるのをなだめて、何かと弁護したり、都合の悪いことは隠してやったりするという、何ともませた役を。それは報いられる望みがないということで、しばしば若者をいっそう熱くさせる、例の第三者の恋だった。

皓が高校二年の年、藍子は、照との間にできた子供をひそかにおろした。その秘密を、母の目から隠すために、皓はどれだけ兄の手助けをしてやったことか。そして翌年、藍子がソ連旅行に出て、そのまま行方不明になったときは、兄とともにどんなに心配したことか。

一年浪人してから、照にならって、外語大の露文科へ入ったとき、皓はようやく自分がみずからの足で立って、ふたりを客観的に眺められる時が来たような気がした。ふたりから離れねばならぬと、ひそかに決心したのだった。

それからしばらくして、行方がわかった藍子は、その年の夏、迎えに行った照につれられて帰国した。そのとき、彼女は半ば精神錯乱の状態だった。そして恢復半ばの翌年の暮に、不可解な事故死を遂げたが、それから三カ月すると、今度は照が同じような事故死に遇った。

その後、何カ月かの曲折を経て、いま、皓は、そのふたりの死の背後にある筈の何ものかを見るために、十一月初めのはやくも雪となったシベリアへ、出かけて来たのだ。

――だが、手を貸してくれる者があったのを幸いに、自分などが出かけて来たからとて、少しばかりロシア語ができるからとて、このはてしなく広大な国で何ほどのことがわかろう？

尾竹が描いた頭もしっぽもない、巨大なのっぺらぼうの絵を見たとき、皓が感じたのは、まさにその意味の不安だった。ソ連邦について読んだ本、集めたパンフや写真、尋ね歩いて耳から得た知識、そんなものが、ここで何の役に立とう。マンモスの毛を、一本引きぬいたほどにもなるまい。だがもうここまで来てしまった以上、引き返すわけにはいかない。第一、この国では、いったんプランをたてて書類に書きこみ、国営旅行社（インツーリスト）に依頼したが最後、旅程は変更できない仕組みだ。

このシベリア鉄道にしてからが、三百何十駅かあるというのに、一般の外国人が途中下車していいのは、イルクーツクとノボシビルスクの二駅だけだ。それでさえ、降りればそれだけ汽車賃が高くなるのである。

皓は、スケッチブックを尾竹に返そうとして、自分の汽車が、今しも急行の停まらない小さい駅を通りすぎるのに気づいた。プラットホームだけしかない、いかにも寒々とした田舎の小駅だ。名前までが〝寒風（シービエルカ）〟である。すぐに後の方へ走り去って、それは見えなくなる。彼は投げやりな気持を押え切れなくなって言った。

「尾竹さん。〝フショーラブノ〟ってロシア語知ってますか？」

「うーん、女の子に関係あることばやろ？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com